

# 研究ノート

# 丸小屋と移動する人々

菊池 勇夫

## I 丸小屋の呼称

近世の松前・蝦夷地における人々の暮らしを描いた絵を見ていると、本州社会では目にすることのない、円錐状の形をした小屋の存在に気づかされる。一般には丸小屋（マルゴヤ）と呼ばれてきた仮設の小屋である。

丸小屋の呼称は近世を通してではなく、18世紀末になって俄に使われるようになったものようである。たとえば、天明5・6年（1785・86）に東蝦夷地踏査の体験をもつ最上徳内は『蝦夷国風俗人情之沙汰』（寛政2・1790年序、谷川編集代表 1969：459）に、クナシリ島の脇乙名ツキノエが魚油・干魚などを船に積んで同島の運上屋にやってきて、浜辺に「丸小屋」を掛けて逗留したと記している。ただ、同書では丸小屋だけでなく、「小屋」「仮小屋」「野宿小屋」もまた使っており、それらに差異があるものなのか分らない。菅江真澄も小屋の円錐形に注意を向けた1人だが、寛政元年に渡島半島日本海沿岸を旅したときの日記『蝦夷喧辞辯』では丸小屋に近似した呼称「丸屋形（マロヤカタ）」が使われ（内田・宮本編 1971：30）、その3年後の寛政4年の道南太平洋側沿岸の旅日記『蝦夷廻天布利』になると、「丸屋形」のほか「円舎（マルヤカタ・マルゴヤ）」とも書き表し（内田・宮本編 1971：92・94）、マルゴヤの呼び名が登場する。

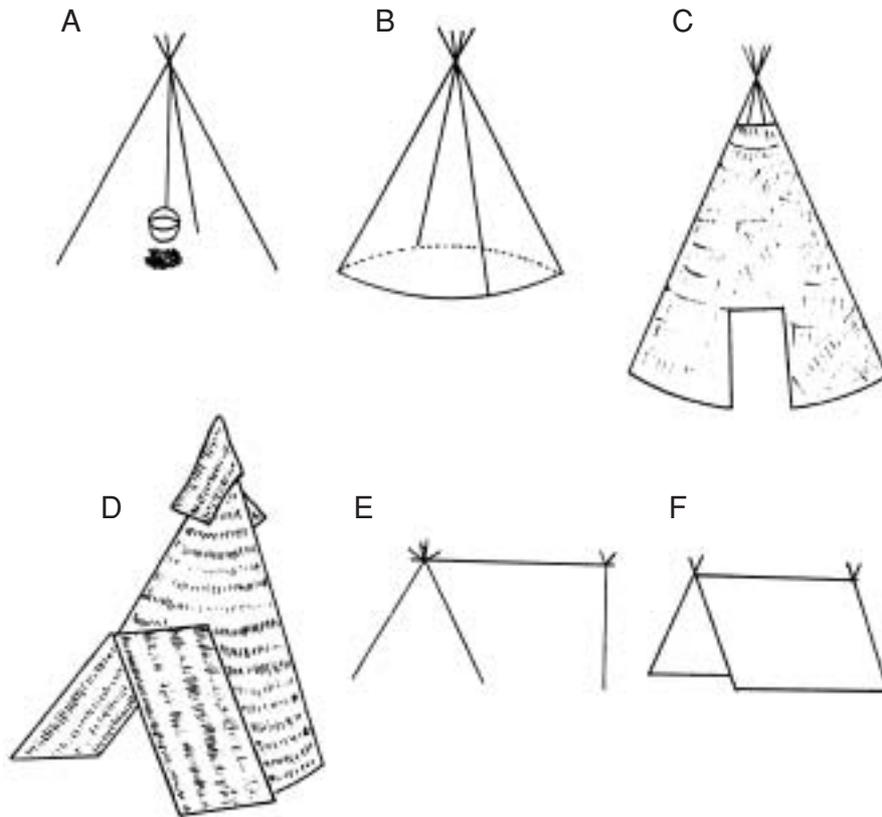
同じく寛政4年（1792）、幕府が実施したソウヤ場所の御救交易のため出張した申原正峯の『夷諺俗話』によれば、西蝦夷地でたびたび「丸小屋」を設営して泊ったとし、その形状について説明している（谷川編集代表 1969：505・507・508）。カラフト探検から帰った徳内もこの御救交易のオムシヤに列席しており、徳内と正峯とは接触があった。おそらく、この寛政4年頃に丸小屋の呼称・表記がほぼ確定し、それが寛政末年の幕府の東蝦夷地直轄に伴う幕府役人らの調査隊に受け継がれ広まったといえそうである。

丸小屋以前には何と呼ばれていたのだろうか。天明3・4年（1783・84）、松前・江差に渡海した江戸の町人平秩東作（稲毛屋金右衛門）は江差の鯨漁の賑わいぶりを見聞し、その様子を『東遊記』に書いているが、そこで丸小屋のことを「丸屋」と表現している（谷川編集代表 1969：428）。マロヤあるいはマルヤと読むのだろう。語感としては真澄の丸屋形（マロヤカタ）に近い。しかし、日本語の丸屋（マロヤ・ヤルヤ）は葦や茅などをそのまま屋根に葺いた粗末な家（小学館『日本国語大辞典』第2版）のことであるから、丸小屋そのものをさすわけではないが、他に適当な言葉を持ち合わせないために、円錐状の形から丸屋がふさわしいと考えての使用なのであろう。

丸小屋への移行的な丸屋の使用例を別にすれば、それまでは単に「小屋」と呼んできたものが該当するようである。シャクシャインの戦いに関する史料に、たとえば弘前藩の『津軽一統志』に「石狩の狄共つくなひの義に付、石狩の川口に三百程小屋をかけ罷有候」（海保翻刻 1998：210）とある小屋は、石狩川の流域に住むアイヌの人々が河口に下ってきて設営したものであるが、丸小屋であったろうか。享保2年（1717）の幕府巡見使一行の記録である『松前蝦夷記』には、松前城下へウイマム（御目見）のためやってくる蝦夷地のアイヌが浜辺に「小屋懸」けて滞在するとの記述があり、「仮立小屋」とも表現している（松前町史編集室編 1974：388-389）。このウイマムのさいの、筵と木の骨組でつくった小屋での暮らしはすでに近世初期のイエズス会宣教師の記録にも出てくる歴史の古いものである（H・チースリク 1962：71）。ウイマムの光景を描いた18世紀中期の小玉貞良『松前屏風』（松前町史編集室編 1984：口絵）では明らかに丸小屋の形状をしているから、巡見使あるいは宣教師が見聞した小屋も丸小屋であった可能性が高い。

したがって、18世紀末の田沼期から寛政の改革期に

丸小屋・三角小屋略図



A.三脚式の鍋吊り B.丸小屋の骨組み C.丸小屋の基本形  
D.覆い・三角屋つきの丸小屋 E.三角小屋の最初の骨組み F.三角小屋の基本形

かけての蝦夷地への関心の高まりのなかで、松前・蝦夷地では珍しくもない円錐状の仮小屋もまた、本州には見られない異文化として表象され、「丸小屋」という言葉が新たに作り出されたということになる。最上徳内あたりの使用例が大きな影響をもったように考えられるが、松前人ではなく本州人による命名であろうというのが、ここでの推測である。

丸小屋のアイヌ語の名称であるが、近世のアイヌ語集として知られる上原熊次郎の『藻汐草』（寛政4年・1792）・『蝦夷語箋』（嘉永7年・1854）では、「野宿小屋・丸小屋」に「カシ」「かし」というアイヌ語を対応させている。また、能登屋円吉の『蝦夷語集録』（文久4年・1864）では「丸小屋」はなく、「野小屋」に「カシ」、「小家」に「クチャ・ケレル」を当てている（以上、金田一解説・成田撰 1972）。なお、近年のアイヌ語辞典ではカシに仮小屋、クチャに狩小屋・山小屋（中川裕『千歳方言アイヌ語辞典』草風館）、あるいはカシに漁小屋（三角屋根状）、クチャにかりごや・狩小屋（田村すず子『沙流方言アイヌ語辞典』草風館）の日本語訳を与えている。丸小屋のみが形状を言い表す呼称であるが、野小屋・小屋・仮小屋・山小屋のなか

に丸小屋が含まれていることもありえよう。

別稿ですでに丸小屋に言及したことがある（菊池 2004・2005）。いくぶん重複することになるが、松前・蝦夷地に住むアイヌの人々や和人の生業と交易にとって、あるいは蝦夷地を踏査する幕府役人等にとっても、欠かせない移動の宿泊手段であった丸小屋について、丸小屋の描かれた絵や、文献史料に書かれた丸小屋の記事を広く集め、丸小屋とはどのようなものなのか、形状（構造）、材料、用途などを念頭において検討してみようと思う。

## Ⅱ 絵や文に見える丸小屋

まず、近世の和人によって丸小屋がどのように観察されていたのか、描かれた図絵や説明の文を紹介することからはじめよう。絵と文を区別せず、およそ年代順に取り上げ、その形態的な特徴など指摘していこう。該当の図絵は掲載する図録等の書名をあげておいたので、それを参照していただきたい。ここではパター的な略図（A～F）を示しておくにとどめる。

①小玉貞良の絵画作品。貞良は18世紀半ば頃活躍し

た松前絵師である。その作品である『松前屏風』・『江差屏風』や、『ウイマムの図（蝦夷古代風俗之図）』、『江差前浜屏風（江差浜鯨漁之図）』・『江差松山屏風』に、円錐形の仮小屋が描かれている。丸小屋の呼称が当時存在したかは前節で述べたように疑わしいが、形状から丸小屋であるのは間違いない。

『松前屏風』（松前町教育委員会蔵岡田本・田付新三氏蔵田付本）は、松前藩主へのウイマム（御目見）のため松前城下（福山）に来訪したアイヌの一行を描く。岡田本・田付本とも、沖の口番所近くの浜辺に丸小屋を設営し、通詞であろうか松前藩士に案内されて松前城（福山館）へ向かうところが描かれている（松前町史編集室編 1984：口絵）。岡田本には沖の口番所近くに大きめの丸小屋、それから少し離れ小さめの丸小屋が間隔を置いて2つ描かれている。だいぶ簡略に描かれ、入口も見えず、支柱の数は4本以上（6本か）で、周囲を箆で囲っている。いっぽう田付本のほうは、岡田本より詳しく、沖の口番所近くの砂浜に大きめの丸小屋2つと、彼等が乗ってきた艀装したアイヌの船（ウイマムチブ）が描かれている。丸小屋の本体の入口部分には2つとも三角屋状の張り出し部分がついており、岡田本と違っている。右側の丸小屋の張り出し部分には鉄鍋のようなものが見える。

『松前屏風』に取り入れられた御目見アイヌの光景は『ウイマムの図（蝦夷古代風俗之図）』（高倉 1972：口絵第1図）に描かれた主題である。現在、左隻部分が不明となり右隻のみとなっているが（北海道大学附属図書館北方資料室蔵）、これには『松前屏風』田付本と同じく、丸小屋に簡易な三角屋状のものが付属し、丸小屋の突端部には降雨が入らないように覆いがしてある。三角屋状の内部には箆が敷かれ、アイヌ女性が座っている。同様の場面はシーボルトの『日本』図録第3巻Ⅶ第18図「アイヌが貢物や商品を運ぶ」に描かれている（齊藤監修 1979）。場面は『ウイマムの図』と共通しているが、シーボルトのものは丸小屋の突端に覆いがなく、支柱の先端が露出している。アイヌのウイマム（御目見）については別稿（菊池 2008）で述べたので、ここでは立ち入らない。

貞良は江差を鳥瞰した屏風絵にも丸小屋を描き込んでいる。『松前屏風』と1双をなす『江差屏風』（田付新三氏蔵田付本、江差町教育委員会編 1986：図1）は江差の春の景色で、前浜には小船が出て鯨の刺網漁が行われ、浜辺に4つの丸小屋が確認される。これらの丸小屋

も三角屋状の入口張り出しがついているように見える。

また、『江差前浜屏風（江差浜鯨漁之図）』・『江差松山屏風』（函館市中央図書館蔵模写本、原本不明、江差町教育委員会編 1986：図2・3）でも丸小屋が欠かせない風景であった。後者の題材は松山から伐り出して川流した木材を河口で回収する木場の作業がメインであるが、獲った鯨を浜で選別・加工している場面もあり、そこに丸小屋が1つ描かれている。覆いは描かれていない。その内部では火が焚かれ鉄鍋が吊り下げられている。前者の鯨漁図は江差の前浜における刺網を使った鯨船の様子とともに、砂浜に立ち並ぶ丸小屋や、漁獲した鯨を一時的に貯蔵しておく小屋（ロウカ・廊下）が描かれ、忙しそうに働く男女の姿が鯨漁の最盛期を物語っている。黄色い衣服はアットゥシと思われるが、それを着ているのはアイヌではなく、被り物などから和人と見るべきだろう。図には丸小屋が林立するように29棟描かれている。丸小屋は鯨漁に集ってきた人々の生活拠点であって、小屋の中で休憩しているのであろうか、煙草を煙管で吸っている人や、鉄瓶で湯を沸かし飲んでいる人のすがたが見られる。丸小屋には覆いがなく、露出する支柱の先端を数えると4本あるいは5本のものが多い。また、三角屋のような張り出しは1つも描かれていない。

②平秩東作『東遊記』。天明3・4年（1783・84）の松前・江差における見聞。江差の鯨漁の賑わいのところに「丸屋」が出てくる。貞良の『江差浜鯨漁之図』を裏付ける記述である。どこの浦であっても、「クキ初たる所」から「火の手」をあげ、これを見て「帆をあげてその所へ集る」を「追鯨」といい、「長き丸太と菅の苫などを船につみ、何方にても丸屋をつくり」、鯨を獲るなどと記している。他村の者が尋ねて入ってきても「魚を捕るものを制する事なし」とあり、松前地の人々には開かれた総入会の鯨漁であった（谷川編集代表 1969：428）。『江差浜鯨漁之図』の丸小屋の箆の囲いは螺旋状ではなく段階状に整って描かれ、材料は稲藁のようにも見えるが、この記述からすれば、苫・菅ということになるのか。

③菅江真澄『蝦夷喧辞辯』・『蝦夷酒天布利』。『蝦夷喧辞辯』は渡島半島西海岸を太田山まで旅をしたときの日記。その寛政元年4月28日条の挿絵の右端のほうに丸小屋が2つ描かれる（内田編 1989：57；内田武志・宮本常一編 1971：口絵の図72）。真澄は相沼（熊石町）浦で下船し、東在の白府（福島町）の阿倍某が

鯨漁のために営む苫小屋に宿を借りたが、そのときの浦の光景。砂浜に寄せる小船（端舟・橋舟）は、沖に碇をおろした船から降りて上陸する人々を乗せている。

真澄は本文には立ち並ぶ「丸屋形」（マロヤカタ）と記しているから、たくさん砂浜に建てられていたのだろう。2つとも形が円錐状だが、左方の突端部分には覆いがついている。右の丸屋形は5本の支柱を円錐状になるように先端部分を束ね、それを筵状のもの（苫）でぐるぐる巻きにしているのが分かる。ここかしこに漁火を焚くのが見え、丸屋形のなかではほた（木の切れ端）を焚き、人がたくさん居並んで三味線を弾いて唄っていた。真澄が泊った「苫小屋」というのは、この丸小屋をさすのであろうか、それとも画面中央・左に描かれた鱈を干す「陸小屋」（萱葺きの和人家屋）のことであろうか。中央の陸小屋に青色の衣服を着た人物が座っているのが見えるが、これが真澄だとすれば陸小屋のほうであったろうか（内田・宮本編 1971：30・口絵の図72）。

『蝦夷廻天布利』には丸小屋の絵は描かれないが、寛政4年（1792）5月24日の記事に、真澄が有珠山への旅を始めるにあたって、昆布刈り船に便乗させてもらい松前を出立した。その朝の様子について、「夜経よりこゝに泊りせし舟子ども、磯なる丸屋形の菅苫とりはなち、さし組みよこたへし柱ども曳やり、みなこぼちはてて舟につみをへて、いざのりね」（内田・宮本編 1971：92）と記している。丸小屋を解体し、それを全部船に積んでいき、浜に上陸したさいにはそれをまた組み立てて寝泊りする様子が観察されている。

④申原正峯『夷諺俗話』。寛政4年、幕府が実施した宗谷場所における御救交易の一行に参加し、日本海側沿岸を旅したときの見聞。運上屋やアイヌの家屋がないところでは、一行はたびたび丸小屋を補理して止泊した。その説明によれば、丸小屋は長さが1丈2～3尺もある丸木を24～25本「円錐」のごとくに立て、それを上のほうから段々に「キナ」で覆ったものである。「キナ」はアイヌの「葦苫」のことである。こうして雨風を凌ぎ、一方に口を開けて出入をし、上には煙ぬきの穴がある。丸小屋の内部は差し渡しおよそ2間程で、丸く座を取って、真中に爐を拵え、煮炊等をしたと、その実体験を記す（谷川編集代表 1969：505）。

⑤和人の観察ではないが、寛政4年（1792）、ネムロに來航したラクスマンは『日本來航日誌』に、「クルーリ毛人は海岸に仮小屋、すなわち円錐状の夏季用幕舎

を建てていた。その建物は草と細いアシから編んだ彼らがツィレラと呼ぶムシロで覆われており、部屋の中央にしつらえる炉を中心に幕舎の中も全体がこのムシロで敷きつめられている。私は上陸して彼らの家に入り、非常に親切に迎えられた」（山下編 2003：421）と記している。夏季用幕舎が円錐状とあるので、丸小屋に相違ないであろう。

⑥谷元旦『蝦夷紀行図譜』のなかの「廻島ノミキリマルコヤニテ野宿ノ図」（泉編 1968：図73「円錐形仮小屋」）。元旦は寛政11年（1799）、渋江長伯の東蝦夷地採葉調査隊に絵師として参加し、『蝦夷紀行（蝦夷蓋開日記）』という旅日記を残しており、廻島とはそのときの経験をさしている。日記によると、元旦らは多くは「旅館」「旅舎」すなわち運上屋に宿泊し、また「夷村」のヲトナの家を「旅館」とすることもあった。図の「マルコヤ」（丸小屋）に相当するのは、5月16日にムカワのアイヌの人たちの小屋に泊ったときの「漁獵小屋」であろうか（板坂編 2002：217、山崎編 2003：448）。5月12日、コイトイの「昼食小屋」に一宿し、「土間の上に葎簀を置、菰筵にて取囲で夜を明しぬ」とあり（板坂編 2002：215、山崎編 2003：446）、こちらの可能性もあるかもしれない。

「マルコヤ」の図にはアイヌの女性・男性が描かれ、右の小屋の内部には炉が拵えてあり、長伯・元旦の一行と思われる人物が炉を囲んで、鉄瓶または鉄鍋を上から吊して湯でも沸かしているのか、あるいは食べ物も煮ているのか断定できないが、そのアイヌ女性と会話をかわしている風である。また小屋の左側に娘であろうか、毛皮を着ている人物が水でも汲んできたのか取手のついた容器を手にもって描かれている。アイヌの人々が海岸で漁撈を行なうために一定期間居住している小屋のような生活の雰囲気を感じさせる。ラクスマンが記す夏季用幕舎のようなものか。絵には説明文はないが、たぶんこの漁獵小屋に泊ったのであろう。「野宿」というのは元旦らの感覚である。5本の支柱が先端部分で括られている。

元旦には『蝦夷器具図式』という作品もあり、そのなかにも「丸小屋図」が描かれている（大塚監修 1991）。なお、谷文晁筆『蝦夷山水器物図巻』に「丸小屋図」が掲載されているが、元旦の「蝦夷器具図式」から写したのであろう（北海道立旭川美術館・近代美術館編 1992：図8）。

⑦遠山景晋『未曾有後記』。文化2年（1805）松前に

渡り、翌年西蝦夷地宗谷まで行ったときの巡視日記。3月29日、スツキに止宿することになったが、運上屋がなく番小屋が1つだけあった。あまりにきたなく、従者の臥すのにも不足したので、沙石の上に丸小屋を作って一宿した。そのとき設営した丸小屋がどのようなものだったか説明している。その「丸小屋」は船の棹を何本も上の方で括り合せ、下をひらき、それを土に立てて柱とし、菅菰で周囲を覆い、中には筵を敷いた。遠山の居るところだけは、身分にふさわしく板敷にし、その上に畳を敷くという念の入れようであった。宇（のき）は狭いが、十畳も敷けるような広さで、同じ船に乗った従者と共に膝を組み肩を並べて一夜を明かしたという（板坂編 2002：343）。④串原正峯の場合と同じく大型の丸小屋だった。

⑧東甯元楨『東海参譚』。上述の遠山隊一行に加わった人物の記録。同じ文化3年3月29日の条に記されている。俄に浜辺に丸小屋を作ったが、船棹を組んで、その上に苫を巻き、雨を凌ぐだけのものだった。大小合わせて23もの丸小屋を建てたといい、「野営をつらねた」景観であった（谷川編集代表 1969：28）。

⑨松田伝十郎『北夷談』。文化5年、カラフト島奥地および山靱地境の見分を間宮林蔵とともに命じられ、カラフト島に赴いた。シラヌシを出船して13里ほど行ったところで浜に丸小屋を掛けて野宿したときの説明文がある。松田のカラフトの旅は丸小屋での寝泊りの繰り返しで、丸小屋なしには成り立たなかった。丸小屋の形状は、細い竿を6、7本集め、その末を縄結にして本を開き、それに「蝦夷キナ」を引き廻したものであった。「蝦夷キナ」は「ガマチがや」の類で筵のように織ったものという（谷川編集代表 1969：107）。また、山靱（山丹）人がカラフト南端のシラヌシに交易のため来着したときには、海岸に丸小屋を掛けて住居すると記している（谷川編集代表 1969：136）。

⑩鳳鳴（千島春里）『アイヌ漁労図』（双幅、文化4年・1807頃、アイヌ民族博物館所蔵）。鯨漁であろうか、砂浜に丸小屋が建てられ、丸小屋の前でアイヌの人たちが集って、獲りたての魚を捌いている様子が描かれる（北海道開拓記念館編 2002：図6-4）。支柱は5本程度で、三角屋状の張り出しはつかない。小屋の内部に大きい鉄鍋が見える。作者不詳『蝦夷風俗図巻』（ライデン民族学博物館所蔵、リッカー美術館編 1980：図の参-21）は、前述①のシーボルトの図の原図となった春里の絵であろうか。これには三角屋状の張り出しが

けられている。

⑪松浦武四郎『校訂蝦夷日誌』三編「ランネベツ露宿の図」（秋葉實翻刻・校訂 1999：図300）。嘉永2年（1849）エトロフ島のランネベツに露宿したときのことである。岩石に樫を渡し、その上に苫を葺いて、寄り木を集めて火を焼き夜を明したが、明け方より少し雨模様になってきた。この場所では凌げそうにないのでどうしたらよいかと話していると、同行のアイヌが何の苫もなく、小屋掛けをした。無雑作な作り方で、「何の論」もいらないと評しながら、車樫を6本程立てて、その上部を1つに結び、これに船の「早物」（麻縄）を4段ばかりにめぐらして苫を葺いたと、急拵えの丸小屋を説明している。車樫というのはアイヌの蝦夷船を漕ぐためのもので、船具を丸小屋の骨組みにしていたことが知られる事例である。中はらくに4人を収容できる広さで、側に火を燃し、苫の根元は皆砂に埋めたので、どのような「颶風」が来ても愁いがなく、雨宿りの用意ができたという（吉田校註 1971：426-427）。

武四郎は他にも、「岩間ニ船具もて丸小屋を架而一宿しける」（吉田校註 1970：416）、あるいは「欸冬の葉をとり丸小屋を架け此中に入夜を明す」（松浦武四郎研究会編 1988：260）などと、丸小屋に泊った経験を少なからず記している。また、武四郎は「ヲルンチセの図」を残しており（『蝦夷訓蒙図彙』『蝦夷山海名産図絵』、秋葉翻刻・編 1997：98-99、270-273）、ヲルンチセというのは、ユウベツ川で夏分に鱒・鮭が川にのぼる頃に、川岸の淵に枯木（寄り木）を棚状に並べ置き、その上に作った欸冬（ふき）の葉で覆った丸小屋のことで、これにひそみ、魚が棚の下に来たなら括槍（マレプ）で突き刺した。

⑫大内餘庵『東蝦夷夜話』（安政7年・1860）の「山中丸小屋を掛たる図」。クスリ詰の幕府役人小田井某がネモロとクスリの境見分のため、土地のアイヌを同道して山に入ったさい、宿りのために設営した丸小屋。ここで狼と出合い、小田井は鉄砲で射止めた（大友編 1972：436）。

⑬松本十郎『石狩十勝両河記行』。札幌在勤の大判官松本十郎（元庄内藩士）が、明治9年（1876）6月から7月にかけての視察旅行のさいに宿泊した丸小屋。6月12日条に、この日ウラシナキ上流の川原に1泊することにし、「着船や否や或ハ薪ヲ集メ、或ハ小屋係ケニ取係、銘々受持ニテ迅速ニ成功、左ニ概図ヲ掲グ。但三十分内ニテ出来」と記している。松本は単に小屋との

み記し、丸小屋とは書いていない。同行のアイヌの人たちが手早く作ったのであろう、30分もかからないで完成したとある。「概図」には3つの形状がスケッチされている。左側が丸小屋で、3本の支柱に「船竿」を使い、まわりをキナと呼ぶ筵で囲ったと説明し、アイヌの人たちが泊った（谷川編集代表 1969：340）。中央は煮炊きのため鍋を吊すことができるように、三脚状に3本の柱を上部で組んだものである。この形状に筵をまわせば丸小屋ができる。右側の三角小屋の形状をしたのは、「洋帆木綿」と書いているようだから、船の帆を屋根代わりにしたのであろう。松本はこれに泊ったのかと思われる。また、6月19日条には陸路荷物を背負っての運送を軽くするために「天幕」（キナ筵、帆）はやめて、その代わりに同行のアイヌが落の葉で雨露を凌げる小屋掛けをしてくれた。形状は丸小屋と同じである。絵の説明文には風のために葉が飛散しないように木で押さえたとある。また本文には、「却テ先キノ帆木綿ヨリ手狭ニシテ、寒防宜様ナリ。土人共一人或二人、三人容リノ小屋ヲ銘々建渡、暫時ニシテ十二、三ノ小屋ヲ設ケ、寂寥タル河ノ側リモーノ村落ヲ生ルニ似タリ」と記している（谷川編集代表 1969：350）。

⑭『蝦夷室』（千穂庵、1883年頃、一枚刷り）に描かれた「ホンヤカタ」の図（北海道開拓記念館編 2002：図11-16）。

以上が、現在までのところ確認した丸小屋関係の図絵、および説明を伴う記述（丸小屋とだけ文に出てくるのは省略）である。

### Ⅲ 丸小屋の構造と用途

前節の事例をもとにして、丸小屋の構造と用途についてまとめてみよう。

まず、構造的な特徴についてである。全体の小屋の形は円錐状をなしており、この形から和人の丸小屋の呼称が生まれたのは動かない。丸小屋はおおむね4～5本、あるいは6～7本の支えとなる柱（丸太など）を用意し、柱の下が円形に広がるように配置し、上の突端部分を束ねて組み立てた構造物である。むろん、支えの柱は事例⑬のように、最低3本あれば設営が可能である。三脚式の構造が原型にあったのは間違いなく、3本の本組みに始まって、柱を増やし円形状に組み立て内部を広くしていくのは自然な発展といえよう。

丸小屋の観察者であった松浦武四郎は箱館奉行支配

組頭勤方向山源大（太）夫の北蝦夷地行に随従し、安政3年（1856）8月10日、ソウヤで向山の死に立ち会った。ランコロマナイで茶毘にふし、一同で骨を拾い、その場所に「岡」を作り、まわりに榎松7株を植えた。その上に3本の柱を三脚状に立て、これに自在鍵を下げ、傍らに木で作った楯を立てた。挿図もそのように描かれている。理由を聞くと、3本の柱は「丸小屋」を意味し、泊るときには自在鍵で飯を炊き食べて行きなさいとのことだという。この地の「葬りし例」とのことであるから、アイヌの習慣にしたがっているのであろうか（高倉新一郎 1978：281、図241）。三脚式が丸小屋の基本形であろうことがここからも窺えよう。平沢屏山『氷割漁図』（函館市中央図書館蔵）に描かれた、3本の支柱の先端を束ね、ガマ（解説文による）で囲った風除けも同様の原理にしたがった装置である（アイヌ文化振興・研究推進機構編 1999：絵57・58）。三脚式は、⑬に見られたように煮炊きの鍋を吊すのにも簡便な方法であり、これを描いた絵も平沢屏山『炊事の図』（アイヌ文化振興・研究推進機構編 1999：絵36）などが知られ、次節で述べる絵のなかにも描き込まれている<sup>(1)</sup>。

柱は木の長い棒のようなものであれば何でもよいだろうが、文字情報では⑦⑧⑩のように船棹（車櫂）を使うとしているものが多い。船で移動して、砂浜に丸小屋を設営する場合、船具を使うのが一番効率的である。アイヌの船は車櫂で漕ぐが、この櫂が手っ取りばやく使われたのであろう。④は24～25本の丸木を支柱にするとしているが、これは幕府高官を泊めるための特別仕様と見るべきであろう。

骨格を組み立てると、入口部分を開けてまわりをムシロ（筵・蓆）で囲った。突端部分は煙り出しにもなるが、雨が入ってくるのでムシロで覆いをする事もあった。③⑥のように螺旋状に巻いたものと、①⑩のように横状に揃えて巻いたものがあった。入口を開けて描いているものが多いが、⑥の元旦の絵にあるように、ムシロを下げるなどして開け閉めしたのであろう。ムシロの素材であるが、苫、菰筵、キナ（筵）、キナ（葦苫）、菅菰、菅苫、蝦夷キナ（ガマチがやの類）などと書かれているように、ガマやカヤ類の草で編んだムシロを使った。和人地の漁民などの場合は本州から移入された稲ワラの筵を使う例があったかもしれない。支柱と同様に、船具として積んでいたムシロを使うことが多かったようだ。また、ムシロの用意がないときには、簡易な方法として落の葉を巻くこともあった。

丸小屋の内部は、中央に炉をこしらえ、木組みの突端から鍋などを炉に吊す、あるいは三脚状の支えを設けて吊せるようにして煮炊きしたものであろう。土間にはムシロを敷いて寝た。⑦のように幕府高官の場合には板敷きや畳を入れることもあったが、概はムシロを敷いただけであった。丸小屋だけの空間では狭い場合、①『ウイマムの図』などのように、その前部に入口が三角屋形の張り出し（前室）を設けることもあった。アイヌの家屋（チセ）がセムと呼ばれる前室を入口部分に設けるとの発想が似ている。

いずれにしても、設営や解体が迅速で、とくに船で移動しているときなど、船具をそのまま利用することができ、移動する生活には非常に便利なものであった。材料を持ち合わせていなくても、丸木や蔭の葉は泊る場所で調達することもできたのである。

つぎに、丸小屋の使用者・用途についてである。使用主体はアイヌ（①⑤⑥⑩⑭）、和人の漁民等（②③）、幕府役人等（④⑦⑧⑨⑪⑫⑬）の大きく分けて3者である。最初にアイヌの場合であるが、漁撈（鯨漁）や、①松前でのウイマムのさいの利用であった。⑤ラクスマンの観察も漁撈のための丸小屋と見てよいだろう。最上徳内はアイヌの生業について『蝦夷国風俗人情之沙汰』の凡例に、以下のように記している。

蝦夷土人都て住所に家宅はありといへども、一生涯の住所とも定めず。稼穡に出る時は家族を連れ伴ひ、器財を携へ其住処をはなれ、己が家宅を丸明にして稼穡に出で、其先々に猟産のある処に仮小屋をかけ住所を定むる也。是蝦夷土地の風儀也。猟産は春夏秋冬によりてある浜となき浜との差別ありて、猟業をすれば年中同所に住居せず、猟産の多き方へ移りて、所々に仮住居して年月を送り一生涯住居を定めず（谷川編集代表 1969：444）

文中の仮小屋はたぶん丸小屋に相違ない。ここには「家宅」（定住性）と「仮小屋」（移動性）の2つの性格を合わせもつアイヌ社会のしくみがよく観察されているといえようか。アイヌの人々は鯨漁などの季節に家族を連れて移動し、浜に丸小屋を建ててそこで暮らし漁に従事した。土地柄や季節により、狩猟や漁撈の内容は異なるが、丸小屋とともに移動し生活していた様子が徳内の記述から伝わってくる。徳内は「或時ツキノエ、魚油、干魚等を船に積みてクナシリ島の運上屋に來り、交易して代り物に米と麴と小間物類を取りて、浜辺に丸小屋を掛て逗留し居ける」（谷川編集代表

1969：459）と書いているが、運上屋へ来て交易する場合もそうした丸小屋を作っていた。ツキノエはクナシリ島のトーフイを本拠とする乙名で、数十人の狩猟団体を組織し、ウルップ島などに出かけてラッコ猟に従事していたことで知られているが、ツキノエはラッコ猟場でもこうした丸小屋生活を送っていたものであろう。

串原の『夷諺俗話』にはソウヤの海鼠引漁のことが記されている。海鼠引に集ってきたアイヌの人々は、「先ソウヤ浜辺に丸小屋をかけ、会所にて種々交易の品を前貸をし、おもに酒を借り、日和待合の内は丸小屋にて酒盛をなし踊り狂ふ」と述べている（谷川編集代表 1969：508）。また同じくソウヤ場所であるが、オホーツク沿岸地域の人々の遭難について述べた箇所、「右水豹取に行時は船に飯糧并に薪水等も用意し、氷の上へ船を引揚、丸小屋をかけ、仮住居をなし、水豹見ゆれば矢を放し」などと書いており（谷川編集代表 1969：507）、流氷の時期に氷上のアザラシが姿を見せ、これを追い掛けて猟をするとき、氷の上に船をあげ、丸小屋を作ったという。いずれにしても、狩猟・漁撈、あるいは交易のため移動するさい、常に丸小屋とともに移動して歩いたアイヌの人々であったことが確認されるだろう。

和人漁民の場合では鯨漁または昆布刈りに出漁していくさいに丸小屋が利用された。別稿で触れたので省略するが、若干付け加えておけば、鯨漁や昆布刈りとどまらず、松山稼ぎの和人たちにも使われていた。渡島半島は松（アスナロ、ヒバ）の産地で江差が積み出し港であったが、松浦武四郎は「中の沢越而半り斗川端に出る。此処皆松山稼のもの丸小屋を架て角物を流すこと也」（吉田校註 1970：512）といった記事なども見逃せないだろう。

幕府役人等の巡視や調査のための蝦夷地の旅は、一般的には運上屋（会所）もしくは番屋に泊ることになるが、運上屋等の宿泊できる施設がない場合には、アイヌの家屋に泊めてもらったり、それもできなければ丸小屋を設営して一宿を過ごすしかなかった。とくに未踏査の場所に入り込むときには丸小屋は不可欠であった。幕府役人の踏査の場合にはアイヌの人々を同行させて物を運ばせたり道案内させたが、丸小屋の設営もアイヌの人々に依存することが多かった。

いずれにせよ、近世の北海道島ではアイヌの人々に限らず、和人漁民や幕府役人にとっても常設の宿泊施

設のないところを移動して歩く場合、丸小屋はなくてはならない自前の宿泊手段であった。もともとはアイヌの人々が生活・生業のために活用してきたものであったが、その簡便さが和人漁民や幕府役人等にも受容されたのである。アイヌから和人への文化伝播の1つの事象としても着目されねばならない。

#### Ⅳ もう一つの仮小屋 ——「三角小屋」——

円錐形の丸小屋とは形状が異なる、もう1つの仮小屋である「三角小屋」についても触れておかななくてはならない。「三角小屋」は松浦武四郎の名づけとあってよいだろうか。『竹四郎廻浦日記』（安政3年・1856）に「三角屋組立様」の図が掲載されている（高倉編1978：口絵189）。それは北蝦夷地（カラフト）の東海岸を北上し、タライカ湾へ入るサツコタンに泊ったときのことで、叢の中に寄り木で「三角小屋」を作り、薪など燃やして体を温め、夕飯の仕度をしたといい、武四郎は案内のアイヌとともに「三角や」の中で丸寝した（高倉編1978：150）。同様の図は『辰（安政三年）手控』にも見ることができる（秋葉翻刻・編2001：184）。その最初の骨組みは、2本の叉木を交差させて立て、間隔をおいたもう一方には1本の叉木を直立させ、それに横木を掛け渡して屋根の棟とするもので、その棟にいくつも棒を両側から傾斜させて立て掛けていく。できあがりはいわば切妻屋根の形となる。2本の棒を交差させたほうが入口になり、その入口側から見ると三角状になるので、武四郎は「三角小屋（三角屋）」と表現したのである。丸小屋の三脚式の構造とは明らかに異なっている。

武四郎による三角小屋の観察は、それ以前の旅、弘化3年（1846）カラフト行の『再航蝦夷日誌』の「露宿仮小屋の図」（吉田1971：197）に見ることができる。図には切妻式の三角小屋と、三脚式の鍋を吊した煮炊き装置が描かれている。三角小屋の入口は交差した2本の棒で支えられ、開放されている。入口反対の奥も入口に同じく2本の棒を交差させているように見え、上述『竹四郎廻浦日記』のように叉木を中心に立てているのかは判然とししない。この「仮小屋」は、北蝦夷地カムイコタンの小沼近くに上陸して一宿しようとしたさい、案内のアイヌが何の苦もなく、暫時に「仮屋」を拵え、楸の杖（枝）に綱を懸て鍋を吊り下げ飯の用意をした

という（吉田1971：196）。また、同書の別箇所にも「山丹人仮屋并鍋の図」（吉田1971：254）があり、「此屋根は則樺又は鮭の皮なり、縫目等甚巧なるもの也」と説明している。自主に渡海してきた山丹人が小屋掛けして住居したものであった。これは入口および奥とも交差する2本の棒が支えになっているように描かれている。三角小屋の中に煮炊きのための三脚構造のようなものが部分的に見えている。前述の⑨松田伝十郎『北夷談』が自主渡来の山丹人は丸小屋に住むと記していたのとは違う観察である。いずれが正確なのか吟味が必要である。

三角小屋は間宮林蔵の『東韃地方紀行』にも描かれている。林蔵はアムール川（黒竜江）を溯上して満洲仮府のあるデレンまで到達しているが、そのデレンに交易のためにやってくる諸民族の「厨房」となる「仮庇」が「樺木皮」で屋を覆った三角小屋の形状をしていた（谷川編集代表1969：189-190）。入口に交差する2本の棒が描かれず、倒れないための骨組みがどうなっているのかは分からない。ここにも山丹人の三脚式の煮炊き装置が描かれている。

武四郎らが観察した三角小屋は地域的にはカラフト（サハリン）やアムール川下流域の住民（カラフトアイヌ、山丹人）に、三脚式の煮炊き装置とともに目撃されていた。北海道ではあまり見られず珍しく感じられたから、記述あるいは描写されたと見るべきか。北海道島での明らかに三角小屋といえそうな図絵は、明治初期になるが、松本十郎『石狩十勝両河記行』にスケッチされたものくらいである。「概図」を見ると、棟を支える柱（叉木）が中央にまっすぐ立てられており、2本の棒を交差させたものをその左右において横木を渡している形状は武四郎が観察したものより複雑であり、この組み方では中に入れそうもないので入口は反対側であろうか。

以上述べてきたように、移動のさい用いる仮設の小屋には丸小屋と三角小屋の2つの形状があった。近世のアイヌ社会では和人の観察によるかぎり丸小屋のほうが卓越していたかのようなのであるが、2つをアイヌの人々はどのように区別していたのであろうか。<sup>(2)</sup>その点には踏み込めないが、丸小屋や三角小屋に着目することによって、北方地域の人々の移動や交易がどのように実現されていたのか、多少とも明らかにしえたならば本稿の目的はとりあえず達していると考えたい。

（きくち・いさお）

## 【注】

- (1) アイヌの家屋についてケトゥンニ（ケツンニ）と呼ばれる三脚式の構造が基本形であるという理解は、鷹部屋福平の「アイヌ屋根の研究と其構造原基体に就て」（鷹部屋 1939：107-161）以来、通説化している。ケツンニを2つ連ねてその上に棟木を載せて屋根構造の基本的骨格が作られているというものである。大林太良もそれに同意を示し、ケツンニの三脚構造を東北アジアの広がりの中に位置づけようとした（大林 1991：245-268）。丸小屋もアイヌの家屋（チセ）も原基は同じということになる。ただし、最近、アイヌの屋根にケツンニ構造が確認できない例があるとし、それを見直すべきであるという見解も出てきている（小林 2006：165-195）。丸小屋に似た構造物は北米インディアンの円錐形テント（ティピ）にも見られ、丸小屋文化圏の人類史にも興味が引かれるものがある。
- (2) 『アイヌ民族誌』上によると、露營および山小屋には円錐形のクチャと住家の屋根形をしたシシェ（キムンクチャ）があったとしている（アイヌ文化保存対策協議会編 1969：203-204）。住家の屋根形が武四郎のいう三角小屋に該当するのだろう。また、丸小屋のことをツمامウンチセ、片流れ小屋をエーアツツセ、合掌小屋をエウツラシップと呼ぶとしている（同上：202-203）。しかし、最初に指摘したように、近世のアイヌ語集では丸小屋をカシとするものがあつた。近世に確認される2つの仮小屋の形状とこれらアイヌ語の「小屋」関係の語彙とがどのように対応しているのだろうか。

## 【参考文献】

アイヌ文化振興・研究推進機構編集

1999 『アイヌの四季と生活』 帯広：十勝毎日新聞社

アイヌ文化保存対策協議会編

1969 『アイヌ民族誌』上 東京：第一法規出版

秋葉實翻刻・編

1997 『松浦武四郎選集』2 札幌：北海道出版企画センター

1999 『校訂蝦夷日誌全』 札幌：北海道出版企画センター

2001 『松浦武四郎選集』3 札幌：北海道出版企画センター

泉靖一編

1968 『アイヌの世界』 東京：鹿島研究所出版会

板坂耀子編

2002 『近世紀行文集成』1（蝦夷篇） 福岡：葦書房

内田武志・宮本常一編

1971 『菅江真澄全集』2 東京：未来社

内田ハチ編

1989 『菅江真澄民俗図絵』上 東京：岩崎美術社

江差町教育委員会編集

1986 『北前船』 江差：「北前船」編集委員会

大塚和義監修

1991 『蝦夷風俗図式・蝦夷器具図式』 東京：安達美術

大友喜作編

1972 『北門叢書』5 東京：国書刊行会大林太良

1991 『北方の民族と文化』 東京：山川出版社

海保嶺夫翻刻・解説

1998 『北方史料集成』4 札幌：北海道出版企画センター

菊池勇夫

2004 「鱒漁に生きる人々—渡島半島西海岸の旅—（菅江真澄から近世史をさぐる①）」『真澄学』1：300-319 山形：東北芸術工科大学東北文化研究センター

2005 「昆布刈りのわざ—渡島半島東海岸の旅—（菅江真澄から近世史をさぐる②）」『真澄学』2：321-345 山形：東北芸術工科大学東北文化研究センター

2008 「アイヌの御目見（ウイマム）儀礼—小玉貞良『松前屏風』を導入として—」『国立歴史民俗博物館研究報告』140 佐倉：国立歴史民俗博物館

金田一京助解説・成田修一撰

1972 『アイヌ語資料叢書』 東京：国書刊行会

小林孝二

2006 「アイヌ民族の住居（チセ）をめぐる視点」『アイヌ文化と北海道の中世社会』（氏家等編） 札幌：北海道出版企画センター

斉藤信監修

1979 『シーボルト『日本』』図録3 東京：雄松堂書店

高倉新一郎

- 1972 『新版アイヌ政策史』 東京：三一書房  
高倉新一郎編
- 1978 『竹四郎廻浦日記』下 札幌：北海道出版企画センター  
鷹部屋福平
- 1939 「アイヌ屋根の研究と其構造原基体に就て」『北方文化研究報告』1 札幌：北海道帝国大学北方文化  
研究室
- 谷川健一編集委員代表
- 1969 『日本庶民生活史料集成』4 東京：三一書房  
北海道開拓記念館編
- 2002 『描かれた北海道』 札幌：北海道開拓記念館・開拓の村文化振興会  
北海道立旭川美術館・北海道立近代美術館編集
- 1992 『蝦夷の風俗画』 北海道：北海道立旭川美術館・北海道立近代美術館  
松浦武四郎研究会編集
- 1988 『校注簡約松浦武四郎自伝』 札幌：松浦武四郎没後100年記念事業協賛会  
松前町史編集室編集
- 1974 『松前町史』史料編1 函館：第一印刷出版部
- 1984 『松前町史』通説編1上 松前：松前町
- 山崎栄作編
- 2003 『東遊奇勝蝦夷編』（渋江長伯シリーズ中） 十和田：山崎栄作
- 山下恒夫編纂
- 2003 『大黒屋光太夫史料集』3 東京：日本評論社
- 吉田武三校註
- 1970 『三航蝦夷日誌』上 東京：吉川弘文館
- 1971 『三航蝦夷日誌』下 東京：吉川弘文館
- リッカー美術館編
- 1980 『蝦夷風俗画展』 東京：財団法人平木浮世絵財団リッカー美術館
- H・チースリク編
- 1962 『北方探検記』 東京：吉川弘文館